

段落で表現する能力を養成する教授法

名 和 敏 光 (訳)

Advanced Oral Drill Exercises at the Paragraph Level.

Toshimitsu NAWA

Abstract:

This paper analyzes the characteristics of advanced students of Chinese language, particularly when participating in oral drill exercises at the paragraph level. Nine suggestions for teaching methods are offered: 1) prepared speech; 2) impromptu speech; 3) hypothetical situations; 4) Conjecture; 5) Compilation; 6) retelling a story; 7) role playing ; 8) Debate; 9) class projects. The number of possible methods is infinite, but teachers should remember that the purpose of such lessons is to train the students to express themselves at the paragraph level.

Key word: advanced oral drill exercises (高級口語での表現する能力の養成); at the paragraph level (段落); characteristics (特徴); teaching methods (教授法); express (表現)

1. は じ め に

伝統的な語学教育は、教えることを主とし、学生は「師匠が歩けば弟子も歩き、師匠が走れば弟子も走る」というように、完全に教師の手配に従うのである。教育のステップは多く、新出単語——本文——文法練習というような順序で進む。それは初級・中級学習者には大変有効であるが、高級レベルに昇るにつれ、初級での豊かな効果に及ばないのは明らかである。高級レベルのステップでの教育の手配や要求にも、この時期の特徴によって、必ず比重があるべきである。

2. 高級クラスでの学生の特徴

中国語の学部システムによると、高級のレベルは3年生の時に相当する。テキストの新出単語は『中国語レベル大綱 (漢語水平考試)』の丙・丁級別の言葉を採用する。即ち、学生は既に三千余りの語彙を身につけているのである。中国における現在の留学生の状況から見れば、正規学部生のレベルは割合一致するが、中国語を習う進修生、所謂長期生 (1年以上在学) の場合、試験の成績に

よって高級クラスに入っても、過去の学習経験がそれぞれ異なる場合もある。中国で1年間以上学習した人もいるし、母国の中国語の学部で学習した人もいるし、独学によって三千余りの語彙を身につけた人もいる。総合成績によって同じ高級クラスに入ったのに、聞く・話す・読む・書く能力の差が大きい。また、過去に習ったものでも、全部使いこなせることは望めない。実際には、一番できる学生でも、「把」を用いた文「受身文」「反語文」「補語文」などにおいて、基本的な誤りを起こす可能性がある。学生は、間違った文を見れば、本人がすぐ直すことができるが、口語は癖 (習慣) になってしまうので、彼らの口語の訓練は的を得たものでなければならない。

現在、中国へ短期留学 (何ヶ月か何週間) する人は徐々に多くなっている。学校から派遣された学生の場合、母国語も同じであるし、中国語のレベルも相対的に一致する。団体の場合、組み合わせられたメンバーは複雑である。オーラル・アプローチ法 (聴説法) によった短期クラスの学生は、少ない。母国において言語の環境に恵まれていないので、聞いたり話したりする能力は弱い。彼らは中国で習った中国語の知識を口語表現能力に変え、特に、段落で表現する能力を身につけること

に期待を持っている。

3. 段落で表現する能力を養成する必要性

長期・短期にかかわらず、口語の教育重点が段落で表現する能力を訓練することであることは、共通認識になっている。どのような方法が最も有効であるかについて、多くの研究者が研究している。段落の枠を設置し、学生に内容を入れさせるという方法が最近はやっている。確かにいいアイデアで、効果もあり、高級段階のいずれの科目にも適する。しかしこの方法は、特に学生が前もって用意することが必要となってしまう。学生はうまくできないことを心配するので、大量の資料を調べ、内容を充実させ、ひいては家庭教師の助けをも求めてしまう。そして、用意したものを一句一句暗記しておいて、授業の時に発表する。結局、せっかく用意したものは、聞く人が完全に（輸出する情報を）理解することができないのである。それは、文章が口語的ではなく文語的であるからである。低い聞き話す能力でレベルの高い文章語を聞く効果は、想像できるであろう。コミュニケーションがよく取れないので、両方の積極性をそいでしまうことになる。

どのように口語の授業の特徴を表したらよいであろうか。どんな方法でもっと自然に考えを表現し、他の人の考えを受け取るか。どのようにしたら学生の開口率が高くなり、標準的に表現するようになるであろうか。

三千の語彙の量は、日常生活に十分である。中国の中国語教育では、他の科目でより高級な語彙と文法を勉強するので、口語の授業では学生が考えを述べることにおもな比重を置くべきである。また、社会生活の中では一方的に考えを述べるだけでなく、相手からの情報も受け入れなければならない。普通の場合では、自分が何を表現するのかは前もって知っており、使う言葉と表現方法をコントロールできるが、相手が何を話すかは予想できない。更に、相手に対して自分の言葉の能力を考慮することを要求することはできない。すぐ反応する能力が必要なのである。即ち、そういう時そういう状況に即応しなければ、コミュニケーションを成立することはできないのである。

4. 幾つかの養成法

「理解思惟の順序と語義発展の手がかりなどの言語の深層構造を中心として、構造形式と関連語彙など言語の表層構造を使うことを補助とする。」という主張は、著者も賛成である。これを高級段階の口語教育の原則とするべきである。口語教育のやり方を閉塞式から開放式に変え、教師を中心とする求心型から学生に放射する遠心型に変換すれば、言語環境はより自然になるであろう。授業中の主役は学生で、教師は監督の役をしなければならない。より話す機会を多く得た学生は、緊張感が減少する。そして、考えが正しいかどうかより、身分や場所柄にふさわしいかどうか、内容が豊かであるかどうか、などの表現が重要なのである。学生の考えが著しく偏っている場合は、学生達に論争することを誘導すれば良い。学生が教室で自分の考えを表現することができれば、成功である。

教師は隠れた存在であるが、非常に重要である。手元の資料を十分に利用し、学生の知識を活用し、授業の時間が無駄にならないように、教師は念入りに準備をしなければならない。

①個人的なスピーチ

ある話題に関して、自分の見方を発表させる方法である。学生が自分で事前に用意した話題を、ある一定の時間の中で、段落で話させる。各自の内容は異なり、それぞれ自分の好む話題を持っている。また、自分の生活の補充として他人の生活にも関心を持っているので、学生の積極性も高いであろう。学生は自分が遭遇したことをよく話題とし、政治・歴史・風俗などにも及ぶ。スピーチの時に内容を理解するために聞き手が質問する時間を取っておく方が良い。時間があれば、全員この話題をもっと深く討論させても良いであろう。この方法は、初・中級絵レベルの学生にとっても有意義である。レベルの低い学生は時間の順序によって事件を述べるが、レベルの高い学生は議論が多い傾向にある。高級レベルの学生には、事件に対して考えることを奨励すべきである。

②キーワードを用いた即興スピーチ

キーワードを提示し、この言葉によって連想し

てスピーチをさせる。例えば、a「喫煙」：タバコの歴史を話しても良いし、自分の経歴を言っても良い。悪習だと言っても良いし、良いことだと言っても良い。b「化粧」：化粧のやり方とか化粧に対する考えなどを述べることができる。c「自転車」：“自転車王国”のことも言えるし、自分の経験を述べても良い。自転車の将来の発展についてでも良いであろう。キーワードによる連想は、教師・学生ともに予想のできない、沸き立つような場面を引き起こす。教室の雰囲気ははつらつとしたものになり、学生の思考も特別速くなるであろう。

キーワードは、多面的な理解と連想のできるのが良いものである。「中国」「箸」「犬」などの一つの名詞でも良いし、「旅行する」「嘘をつく」「おやつを食べる」などの動詞や句でも良いし、「友情」「幸福」などの抽象的な言葉でも良い。良いキーワードは言葉自身が客観的なものであるが、使うときにフィーリングを加味することができる。教師がデザインしておくほか、学生に出させても良い。教師の重要な仕事は、学生の正しくない或いは連続しない表現を、もう一度中国語で繰り返さなければならない。学生がすぐ覚えておくことは強要しなくても良い。教師が述べたことはテキストの補助となる。書いたものではなく、言ったものである。本当の口語の表現である。これは良性刺激であり、学生の学習の全過程から見れば、時間を無駄にすることではない。

③仮定、空想をする

人は想像力がなければ、世界はきっと暗くなることであろう。学生にとって不可能なことを想像するのは、面白い結果が出るかもしれない。裏付ける事実はないので、思う存分想像することができる。個人の経歴や知識背景や想像力などによって、結果も様々である。話題が良ければ、学生の反応はとても活発である。「あと一ヶ月（二週間・三日間など）の命しかない場合、どんなことをするであろうか。」「どのような晩年生活を自分は望むか。」「三十年後に世界はどんな様子になるか。」「世界中に一人残された場合、何をやるべきか。」など、程遠い現実には条件を設定し、学生に想像させる。

④あらすじを推測する

映画やドラマなどの場面を使って、学生にあらすじや登場人物が何を言っているかを推測させることである。この練習は文型と段落の訓練にはとても有効である。練習用の部分は、複雑である必要はない。教師はその背景を紹介してから言葉・文型・構造を限定し、学生が推測した後に、原劇の話と対照させる。短い出し物や寸劇など、良い資料になる。推測したことに筋が通っていれば十分である。また、一部分のドラマを放映し、学生に後半のあらすじを推測させてもいい。結びは開放式になるので、見方が異なる人は討論するまでに至る。教育の効果を保証するために、教師は学生のレベルによって、資料を選んで用意しなければならない。

⑤絵で話しを作る

漫画・写真を利用して、話や会話をさせたりすることである。例えば、学生は初・中級の段階で診察の話を学習することがある。しかしそれは、風邪・発熱・入院などの簡単な内容に過ぎず、複雑な症状の表現はまだ身につけていない。不眠症・脱毛（髪の毛が薄くなる）・肥満などのように、ひどい病気ではないが、人を悩ませるものなどを用い、学生にペアを作らせ、一人が悩みを述べ、一人がアイデアを出すことを練習させる。病院に行くという解決法は禁止。著者（劉）も、中国の小学生の放課後の書道クラスに親が付いて練習するという何枚かの写真を使ったことがある。「中国の両親はつらく疲れるな。」「子供がかわいそうよ。」「同情すべきは親たちの心・気持ち。」などいろいろな感想が出された。とにかくこれらの現象に対し、自分が判断を下さなければならない。

⑥言い換えて話す

人数によって、内容の異なる文章を配り、予習の上教壇上でその概要を発表させることである。言葉の問題を解決するために、教師は学生の質問に答えてから、学生に黒板の前で自分が読んだ内容を述べさせる。あらすじのある文章を叙述するという練習は比較的行い易い。なぜなら、述べた内容はそれぞれ異なるので、学生は叙述者に対して趣味を持つからである。述べた後に、学生に質問したり討論したり自分の感想を表現したりさせる。また、「隣人関係」「子供の教育」「夫婦関係」

等のように主題を総括すると、学生が聞き逃したり誤解するのを防ぐことができる。更に、学生の閲読量が足りない欠点も補える。一種類のテキストだけを使うと、学生の接触する資料が細かすぎても少ないので、学生の受容能力にとって時間の浪費である。逆に、学生が選択することができる大量な資料を提供すれば、より勉強になる。わざわざ言葉のポイントを出す必要は無い。理解する上で、大筋や概要を述べれば良い。実は、興味のある資料を使って、暗記しておく人がよく見える。

教師が必要であると思ったら、新しい言葉や文型を書き出し、あるいはプリントしておく方が良い。学生がすぐに質問することも奨励すべきである。この方法によると、教師の仕事量がきつと増えるので、他のテキストの文章を利用することも一つの手段である。それらの文章は標準的なものであり、言葉や用例もそのまま使用することができる。その他、読みがいのあるものや討論を引き起こし易い新聞・雑誌から選んでも良いのである。

⑦役割を演じる

場面を設定して、学生に妥当な表現を訓練させることである。我々はよく、学生が教科書で習った事柄は役に立たないという感想を漏らしているのを耳にする。それは実際、具体的な場面での訓練が欠けているので、活用できないだけなのである。たとえばパーティーの司会者として、ゲストや登場人物を紹介する場面を設定することができる。紹介する時は、二言三言だけでなく、ユーモア等を含める必要がある。演技の前に学生にビデオを見せ、模倣して練習をさせる。また、「部屋を変えたい(長い休みを取る、学部に入る、クラスを調整する、など)理由を説明する。」「代表団の団長として祝賀会(答礼の宴)でスピーチをする。」「指導教授と自分の卒業論文の計画を相談する(リーダーと自分の仕事の計画を話す)。」「など、できるだけ学生の生活に密接な場面を用意すべきである。学生が自分で設計デザインした場面に、一人か二人で役割を指定して演じさせても良い。

⑧ディベート

ディベートや模擬裁判を行うことである。但し、正式な論弁より規模を小さくする。話題は、多く用意する方が良い。一対一あるいは二対二のよう

に組み合わせ、自分の興味と自信がある話題を選び、正方反方に分かれて議論をする。始まる前に、互いに自分の考えを交換し、相手の弱い点に不意打ちをかける。一人か二人の判定者は、判定の理由を必ず述べなければならない。多国籍の学生が在籍するクラスでは、異なる価値観や考えに鮮明な特徴が現れ、ディベートはとても盛り上がる。「愛は／お金は結婚の一番重要な条件である」「女性は仕事をする／家にいるべきである」「中学生の恋愛は有益／有害である」などは、表面的な生活内容にかたよるのを避け、深く論争することができる。この方法は、高いレベルの思弁能力が必要なので、十分な準備をしないと効果は無い。但し、高級クラスの学生について言えば、この方法は有効である。学生は、大人であるので、ディベートのやり方を知らないわけではない。ただ、母国語が中国語になるだけである。

教師はディベートのテーマを確定したら、学生にテーマに関する資料を提供しなければならない。

⑨その他

中国で留学生は、基本的に全日制で勉強している。小人数のクラスなので短時間で親しくなる。教師と学生の接触も教室に限られない。学習内容も、教室の外に移せば、学生は勉強の辛さをそれ程感じないであろう。活動自身は学習であるが、学生の積極性を引き出し、半分の労力で倍の成果を挙げることができる。例えば、一人ずつおかずを持ってピクニックしたり、大きな場所でパーティーをして、持って来た食物に対し「おいしさ」「きれいさ」「栄養の豊かさ」「作り易さ」「複雑さ」などの特色を批評し(順位を付けることはしない)、その後で自分の作り方も述べる。いくら簡単な料理でも、材料だけでは作れるはずはないので、段落による表現を練習する上だけでなく、同時に「食品」「調理」「批評」に関する言葉も練習できる。

その他、様々な方法を用いることができる。この種のやり方では、固定したテキストでは不十分で、テキストは補充資料とするしかない。教師の話は少なくなったが(これもこの教授法の目標である)、責任は少しも減っていない。教師は教室活動をコントロールして指導し、授業の雰囲気調整すべきである。同時に、学生の典型的な誤

りや討論中に出た新しい言葉・文法を記録したり、より適当な言い方を提示しなければならない。更に、整理したものを学生に配り、言葉と文法のポイントにする。学生の誤りは、先ず学生に直させ、次いで教師が説明すると、印象がより強くなる。

学生の新出単語が多くなりすぎるのではないかと心配する必要は無い。同じクラスの学生は、語彙の量が大体一致しているし、話の中に新しい言葉ばかりであったら他の人に伝えることに影響があり、自分も流暢に表現することができないはずである。新しい言葉をよく使う学生に対しては、新出単語を黒板に書かせ、説明させるとよい。普通の学生はこの作業を苦とし、多量な新出単語を

使うのを避けるようになるであろう。口語の授業の主な目的は、語彙の量を増やし、言語知識を説明することではなく、大量の表現を訓練し、習った言語知識を口語を通して消化吸收し、同時に口語で表現する能力を高めることである。学生の流暢で内容豊か、形式的に正しい表現を養成することが、口語教育の任務であり、教室で学生が生き生きとし、開口率が高く、段落率も高いのが、高級口語授業の特色である。

原名：劉元満 著 「成段表達的幾種強化訓練法」
原載：『對外漢語教學法研究』 1996年8月北京
大學出版社發行（P75～83）

（1998年12月22日受理）

